

農を活かした新たなライフスタイルを考える

－地産官学連携の取組を通じて－

実践女子大学 生活科学部 現代生活学科 准教授

野津 喬 (のづ たかし)

1. はじめに

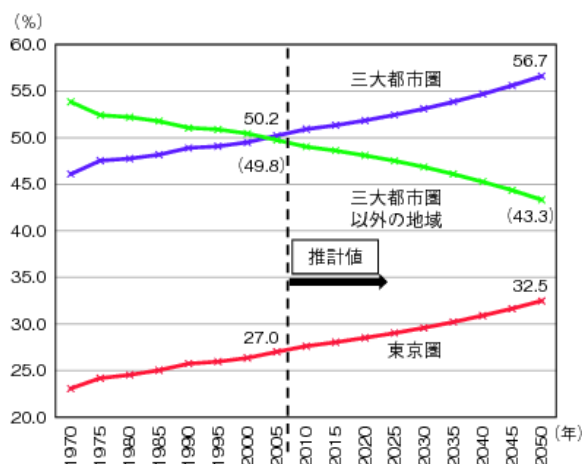
皆さんは「農業」あるいは「農村」と聞いてどのようなイメージを持たれるでしょうか。おそらく、「お米や野菜（農産物）などが作られているところ」という印象を持つ人が多いのではないかと思います。実際に 2014 年に内閣府が実施した「農山漁村に関する世論調査」では、「農村の持つ役割の中で何が特に重要と考えるか」という質問に対し、「食料を生産する場としての役割」と答える人が最も多く、8 割以上に達しました。しかし、「あなた（農業・農村）は作る人、わたし（都市）は食べる人」というこの理解は果たして正しいのでしょうか？

本稿では、これまで都市と農業・農村の関係がどのように変化してきたか、そして今後の展望として都市と農業・農村の関係について、二項対立的な捉え方ではない「生活者視点」の重要性、そして「農を活かした新たなライフスタイル」の可能性について、実践女子大学現代生活学科で実施している地産学官連携の取組を題材として考えます。

2. 都市と農業・農村の関係の変化

（1）農業・農村「から」都市へ ―産業政策の視点から―

農業・農村は第 2 次世界大戦後から長年、都市部への労働力供給基地としての役割を果たしてきました。高度成長期以降、東京圏をはじめとする三大都市圏を中心として産業（シゴト）が発展・集積し、そこでの労働力が必要になると並行して地方から都市への人口流出が進んだのです。バブル経済崩壊後の数年間、都市から地方への人口移動が進んだ時期もありましたが、それ以降は引き続き一貫して、地方から都市への人口流出が続いています（図 1）。

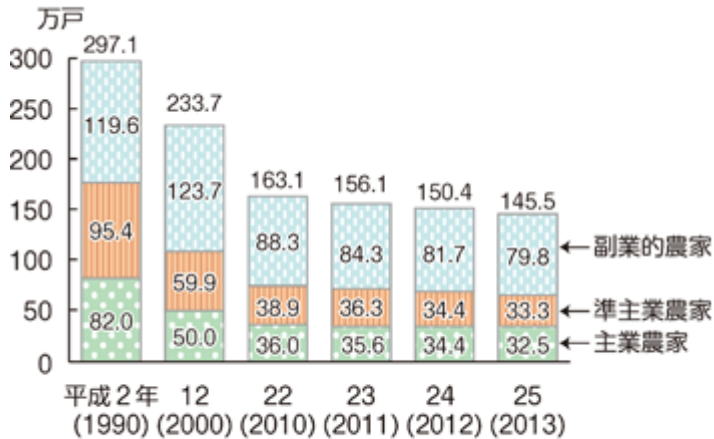


（図 1）三大都市圏及び東京圏の人口が総人口に占める割合

〈出典〉国土交通省国土審議会政策部会長期展望委員会「国土の長期展望」中間とりまとめ

その結果、地方において農業をシゴトとする人（農業従事者）は急激に減少してきました。主副業別販売農家数の推移を見ると、1990年からのわずか15年だけみても約300万戸から約150万戸へと半減しています（図2）。このように農業をシゴトとする人が急減する一方で、低下し続ける食料自給率を維持するために国が推進してきた政策が「農業生産の効率化・低コスト化」です。農地の集約化、農業経営の大規模化、高性能な農業機械の導入などにより、農業をシゴトとする人が減少しても農業生産を維持できるための方策を国は模索してきたのです。

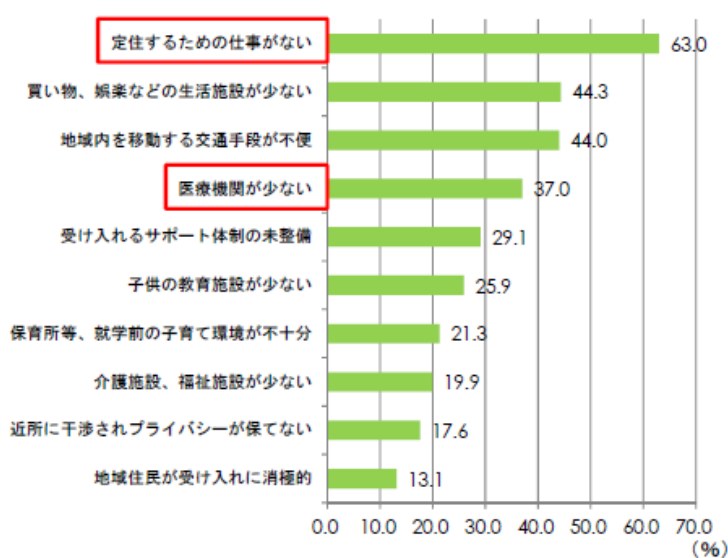
（図2）主副業別販売農家数の推移



資料：農林水産省「農林業センサス」、「農業構造動態調査」

（2）都市「から」農業・農村へ ―地域政策の視点から―

しかしながらこれらの「農業生産の効率化・低コスト化」を推進する政策は、「産業」としての農業を維持するための方策とはなりえても、「地域」としての農村を維持するための方策とは必ずしもなりえませんでした。効率化・低コスト化が進み、少ない人数で農業を支えることが可能となる一方で、農村では人口減少・高齢化が急速に進展し、社会的資本や共同活動の維持が難しい地域が全国各地で出現するようになりました。そのような農村部において、人口減少をくい止める上で解決すべき課題として最も多く挙げられるのが「定住するためのシゴトがない」ことです（図3）。

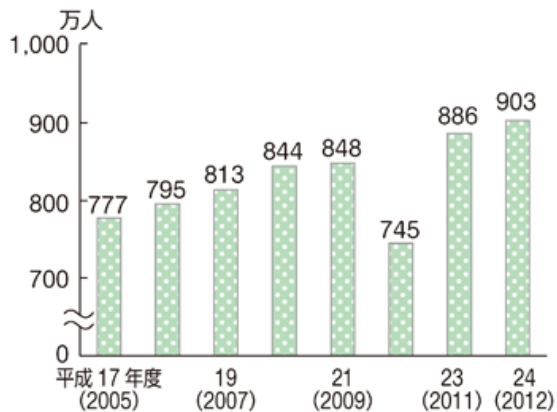


（図3）都市住民が農山漁村地域に定住する際の
問題点

これまでの日本においては、農業・農村「から」都市にヒトを移動させ、都市圏で発展・集積したシゴトによって創出された富（カネ）を補助金などの形で都市「から」農業・農村に還流させることにより、地域の維持を図ってきた側面がありました。しかしながらバブル経済崩壊以降、日本の産業全体の成長力が踊り場にさしかかっていること、国の財政状況が厳しくなっていることなどから、このスタイルによる地域政策を今後も継続していくことは難しくなっています。

このような中で国は、「都市・農村交流」の取組を推進しています（図4）。これは農業・農村が持つ地域資源に魅力を感じる都市のヒトを主なターゲットとし、グリーン・ツーリズムなどの農村での一時滞在型の観光から、二地域居住型、定住型までを含む多様な形態によって、都市「から」農業・農村にヒトの流れを呼び戻そうとする取組です。

（図4）グリーン・ツーリズム施設への宿泊者数の推移



資料：農林水産省調べ

注：平成 22(2010)年度の宿泊者数は被災 3 県(岩手県、宮城県、福島県)を除いた数値。

また国は、農業・農村の活性化を図るため、6次産業化、つまり農業・農村が食料生産の役割のみにとどまるのではなく、生産した農産物を用いて自ら加工食品を製造する、あるいは農協等への委託販売ではなく自ら農産物を販売するなどの取組も推進しています。6次産業化の取組は農業の多角化、収益力の増加という「産業政策」の文脈で捉えられることも多いですが、筆者としてはむしろ、農業・農村「から」都市への外部化を進めてきた「シゴト」を再び、都市「から」農業・農村に呼び戻すという地域政策的な視点が重要だと考えています。

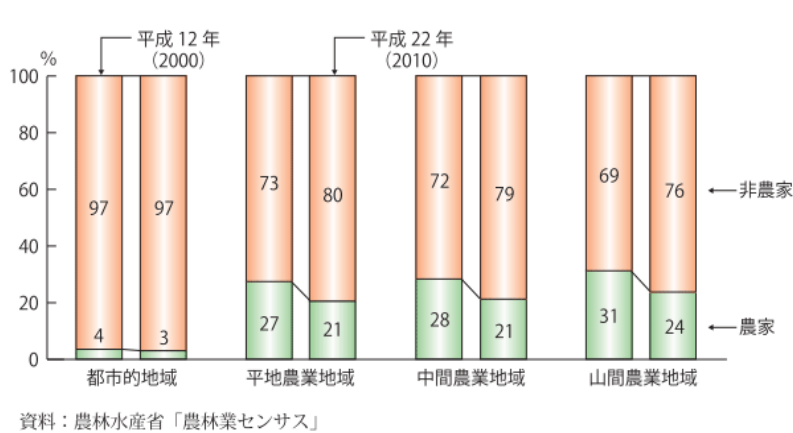
3. 都市「の」農業・農村、農業・農村「の」都市 ―新たな生活者政策の可能性―

（1）都市と農業・農村の関係を捉え直す

都市・農村交流や6次産業化などの政策は、国が進める「地方創生」を実現していく上で重要な取組です。一方で都市・農村交流や6次産業化を含め、これまでのように都市「と」農業・農村の2者を「対」のものとして捉えて政策を実施している限りにおいては、その意義及び政策の効果には一定の限界もあると考えています。

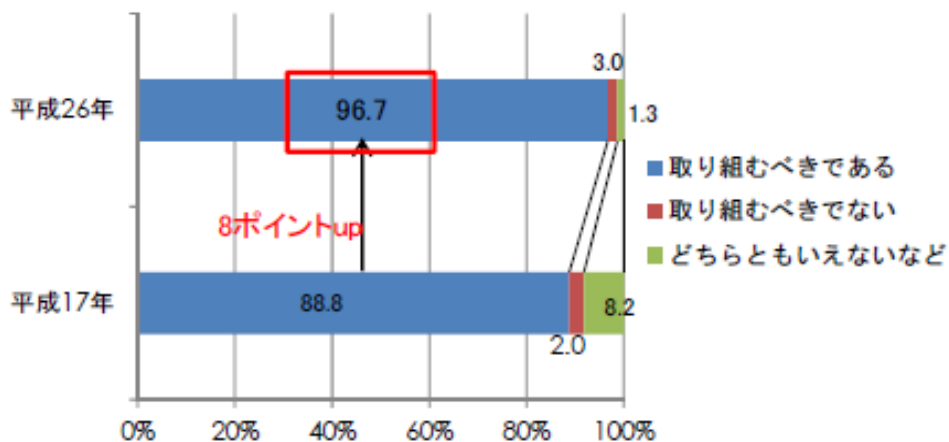
例えば農村（農業地域）では現在、住民に占める農業者の割合は2割程度まで減少しています（図5）。わたしたちが心に抱く「農村」のイメージとは異なり、現実世界の「農村」では住民の圧倒的多数（約

8割) が非農家である、つまり農業・農村「の」中に非農業・農村的要素、都市的要素を多く内包しているという状況が拡大しています。

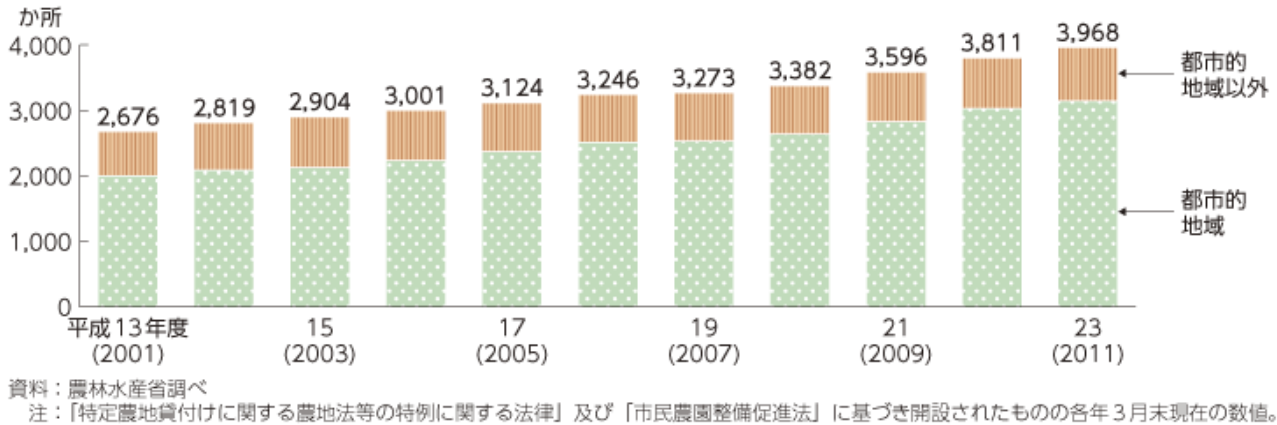


一方で近年、都市部の住民を中心として食や農業・農村への関心度が高まりつつあります。子供たちに農山漁村地域での人々との交流や自然とふれあう機会を提供する体験学習が必要だと考える人の割合は、10年前と比較して大幅に増加しています(図6)。また、都市住民がレクリエーション等を目的として農作業を行う市民農園の開設数は増加傾向にあり、応募倍率は東京23区では2.6倍、名古屋市3.0倍、大阪市3.3倍という人気ぶりです。これらの動きは、食料の生産現場から消費者までをつなぐフードチェーンが高度化・複雑化することによって「食のブラックボックス化」が急激に進む中で、食の源である農業・農村が都市において見えづらくなっていることへの漠然とした不安、裏を返せば都市「の」中に農業・農村的要素を取り戻すことの必要性、重要性を感じる人が増えている一つの現れとも言えるでしょう。

子供たちに農山漁村地域での人々との交流や自然とふれあう機会を学校が提供する体験学習についてどのように考えるか。
(総回答者数1,880人)



(図6) 子どもに対する農村地域での体験学習の必要性



(図7) 市民農園の開設数の推移

(2) 新たな生活者政策視点の重要性

このような都市と農業・農村の関係性の変化を背景として、「食育」をはじめとする「消費者政策」の重要性が指摘されることがあります。しかしながら、仮に「作る人」としての農業・農村と、「食べる人」としての（都市住民が大きな割合を占める）消費者を「対」のものとして捉え、「消費者」の消費活動にのみ着目した政策を実施するとすれば、これまで論じてきた農業・農村に関する政策と同様、その意義及び政策の効果には一定の限界があるでしょう。

私たちが生きていく上で、食料生産、食料消費のどちらかのみでは健全な生活を営むことは出来ません。筆者としては、農業・農村と都市（消費者）を分断して「農業・農村政策」、「消費者政策」という縦割りの政策を実施するのではなく、今後は生活者の視点からこれらの課題を総合的、横断的に捉えていく「生活者政策」の推進が重要であると考えています。

4. 地域住民、行政、産業、大学による対話型公開市民講座

(1) 現代生活学科の学びのアプローチ

筆者が所属する実践女子大学現代生活学科は、2014年に設置されたばかりの新しい学科です。本学科はまさにこれまで論じてきた「生活者」の視点から、今後の日本における重要なテーマである「環境」、「メディア」、「自立社会」を統合的、横断的に捉えていくことを目的としています。また本学科では企業連携、地域連携により、「講義形式」ではない「対話形式」、いわゆるアクティブラーニングを中心とした、社会で通用する基礎力を身につけるための実践的な教育を目指しています。

東京都日野市に立地する実践女子大学では、以前より地域貢献を重視した取組を行ってきました。その一環として毎年度開催されているのが「公開市民講座」です。公開市民講座では、大学の学びを地域に還元することを目的として学部、学科の特色を生かしたさまざまな講座が開かれてきました。一方で、これまでの公開市民講座では大学の学びを地域に還元するという目的を重視するあまり、いわゆる「講義形式」、つまり講師が受講生である市民に対して知識を伝授するスタイルが中心となっていました。

このような背景を踏まえ、現代生活学科として初めて開催する今回の公開市民講座は、本学科のフィ

ールドである「環境」、「自立社会」に横断的に関係する「農を活かした新たなライフスタイルを考える」をテーマとし、またその方式として従来の「講義形式」ではない「参加型・対話型」の講座として実施することとしました。

（２）公開市民講座の形式

今回の市民公開講座では、女子大生（本学科の１年生）、地域住民、行政（農林水産省関東農政局の担当課長）、産業（農業協同組合の幹部、農業者）という、バックグラウンドや今回のテーマに関する知識量が全く異なる者が参加することを踏まえ、これらの参加者が互いに実のある対話を実現できるよう、「ワールドカフェ」方式によるディスカッションを中心として実施することとしました。

ワールドカフェとは参加者を少人数のグループに分け、リラックスしながら１つのテーマについて深く議論を行い、かつメンバーをシャッフルしながら複数回のディスカッションを行うことにより、あたかもその場にいる全員で議論しているかのような効果が期待できるディスカッションの一手法です。（ワールドカフェの詳細については「ワールド・カフェをやろう！」（香取一昭・大川恒(著)）をご参照下さい。）

本学科では授業でも何度かワールドカフェを実施しており、議論に対する学生の主体性、積極性の涵養に効果を上げていますが、社会人、しかも今回のように多様なバックグラウンドを持つ参加者を交えて行うのは今回が初めてだったため、正直に言えば筆者も若干の不安を持っていた開催でした。

（３）ゲストによる話題提供

しかしながらふたを開けてみれば、筆者が事前に抱いた不安は杞憂でした。公開市民講座当日は、「農を活かした新たなライフスタイルを考える」というテーマについて、約４０名の参加者による熱心な議論が展開されました。

まず冒頭に、参加者の議論のベクトルを合わせるため、３人のゲスト（専門家）からテーマにまつわる話題提供をしていただきました。最初に農林水産省関東農政局農村振興課の三善浩二課長から、「都市農業の新たな展開と可能性」についてお話を頂きました。三善課長からは、都市における農業は新鮮で安全な農産物の供給だけでなく、身近な農業体験・交流活動の場の提供、災害時の防災空間の確保、やすらぎや潤いをもたらす緑地空間の提供、都市住民の農業への理解の醸成といった多様な役割を果たしていること、また最近では植物工場や再生可能エネルギーなど、都市的な新たな工業技術が農業の分野に応用されていることについてのご紹介がありました（次ページ 図７）。



(図7) 都市農業の多様な役割

次にJA東京みなみ日野七生地区 指導経済課の明石幹生課長から、「日野農業の現状と課題」についてお話を頂きました。明石課長からは、日野市の農業の現状について詳細なデータに基づいてご説明いただくとともに、今後の日野市農業の課題として、「安心して農業のできる環境づくり」、「農業の担い手と仲間づくり」、「市民と農家との交流・体験づくり」の3つを挙げていただきました。

最後に当初の予定にはなかったのですが、今回の公開市民講座にご参加頂いた地元の農業者であり、JA 東京みなみ野菜部会連絡協議会の顧問でもある小林和男様から、「実践している取組について紹介したい」とのお申し出があったため、急きょ3人目のゲストとしてお話を頂きました。小林様からは、農業についての理解を深めてもらうために15年ほど前から地域の子どもたちを対象とした農作業体験の場を提供していること、地域住民が魅力を感じる「魅せる農業」を目指すため体験農園を開設していること等、現場視点からの報告を頂きました。

(4) 参加者によるワールドカフェ

ゲストからの話題提供を踏まえた参加者によるワールドカフェでは、地域住民、産官のゲスト、そして本学の学生と教員が入り交じり、3～4人ずつの小グループに分かれて「「農を活かした新たなライフスタイル」、実現するためにやってみたら？こんなこと」というテーマでディスカッションを行いました。授業で学生同士のワールドカフェは経験しているとはいえ、学生にとっては社会人を交えた話し合いを行うのは初めての経験だったということもあり、最初は幾分硬さも感じられましたが、地域住民やゲストの方々のご配慮もあって学生もすぐに雰囲気慣れ、柔軟な発想から積極的にディスカッションに参加していました。ほとんどの参加者は初対面にもかかわらず、予定していた時間をオーバーするほど熱

心な議論が交わされました。



(図8) ワールドカフェの様子

ワールドカフェは通常、自由な雰囲気で行うことを重視して、議論の結論を出す必要がないことをその特徴の一つとしていますが、今回の公開市民講座ではワールドカフェの自由な雰囲気は残しつつも、次の「フィッシュボウルダイアログ」につなげるため、各グループごとにディスカッションで最も印象に残った話題を1～3つ挙げてもらいました。「農作業着や市場など、農業に関わるものに「おしゃれ」を取り入れる」、「規格外の野菜・果物を加工したフレッシュジューススタンドを設置する」、「生産から食べるところまでを体験できる農業テーマパークを開設する」など、女子大生の新鮮な感性と地産官学の知見が融合したユニークなアイデアが数多く出されました。

対話から生まれたアイデア

※一部抜粋

- 農作業着や市場など、農業に関わるものに「おしゃれ」を取り入れる
- ジューススタンドを設置する
- 気軽・身近に農業体験できる場を創造する
- 野菜をプランターで栽培するスタイルの普及を図る
- 生産から食べるところまで体験できる農業テーマパークを開設する
- 農地付きマンションを建設する

(図9) ワールドカフェから生まれたアイデア

(一部抜粋)

(5) ゲスト及び本学教員によるフィッシュボウルダイアログ

続く「フィッシュボウルダイアログ」では、ワールドカフェで多く意見が出ていた「農とファッション」、「地域住民の農業体験」の2つの話題を中心として、本学の教員とゲストによるパネルディスカッションを行いました。フィッシュボウルダイアログとは、パネラーが会場の中央で車座となり、他の参加者はその様子を金魚鉢（フィッシュボウル）に見立てて周辺を取り囲み、議論を見守るパネルディスカッションの一方式です。



(図10) フィッシュボウルダイアログの様子

フィッシュボウルダイアログではパネラー同士の議論にとどまらず、ワールドカフェの雰囲気を引き継いだ参加者全体による活発な議論が展開されることを企図して、筆者（司会）から会場に対して、「金魚鉢（フィッシュボウル）の金魚（パネラー）に餌（感想や意見）をあげてください！」と呼びかけました。

その結果、例えば「農とファッション」については、

- ・ 私は日野で農地を借りて農作業をしているが、機能的でおしゃれな作業着がない
- ・ 農産物の販売所も、名前を含めておしゃれな要素を採り入れてはどうか？

との会場からの意見を受けて、パネラーから、

- ・ 「若い人たちに農に参加してもらうためにはファッションが重要」という発想は、自分たちには無かったもので新鮮
- ・ おしゃれさや格好良さはこれからどんどん採り入れていきたい。野菜・果物の個売りなど、売り方もおしゃれにしたら面白い

等の発言があったり、「農業体験」について、

- ・ 農業体験をしても都市生活の中では活動を継続できない。ベランダや屋上での野菜のプランター栽培など、日常的かつ気軽にできる取り組みを広げること大切

との会場からの意見を受けて、パネラーから、

- ・ 地域住民が農に触れる機会が少ないことは実感している。解決策の一つとして、プランターで野菜を作るなどの講習会なども必要
- ・ 日野で「田園都市」を実現したい。都市型ライフスタイルと農地を共存させ、作物や環境など農の恵みを地域に還元していきたい

等の議論が展開されるなど、パネラーのみでなく、会場を巻き込んだ双方向、創発的な話し合いが活発に進められました（図 11）。



(図11) パネラーに対する学生の発言の様子

(6) 公開市民講座の成果

今回の公開市民講座では終了後にアンケートを実施し、参加者の方の感想を伺いました。地域住民の方からは、以下のような感想が寄せられました。

- 農水省、J A、農業者、教授、学生、市民と多様な人々が語りやすい雰囲気の中で奥深いディスカッションができました。(50代女性)
- 市内だけでなく農業というものに対しての考えが少し変わりました。身近にできることから少しずつ農業に関われたらと思います。(30代女性)
- 日野市の農の現状を知ることができたことにより、日野をもっとよりよい町にしたいと思いました。(50代女性)
- 学生さんと議論を持つことができる場は貴重だと思いました。(40代女性)
また本学の学生からは、以下のような感想が寄せられました。
- 今回、友達だけでなく専門家の方や一般の方とも一緒にワールドカフェを行い、様々な意見を聞き話し合うことが出来て良い経験になりました。
- 授業で何度か経験したワールドカフェ方式だったので話しやすかったです。市民の方々の農業を経験した上での、自分では気づかなかった視点からのお話を聞くことが出来ました。
- わたし自身、あまり「農」について興味がありませんでしたが、今回参加してみて「農」について考えることも楽しいと感じました。(今後は) 農とメディアのつながりについて調べてみるのも楽しそうだと思いました。

さらにアンケートでは参加者に対して、「講座への満足度」と「講座受講後に都市と農業の問題について関心が高まったか」の2点についても5段階評価により質問しました。いずれの設問についても90%を超える参加者から「満足した」、「この問題についての関心が高まった」との回答を頂きました(図12)。

(図12) 公開市民講座終了

後のアンケート結果（抜粋）

○ 講座の内容は有意義だったか。

満足	どちらかといえば満足	どちらかといえば不満	不満	無回答
65%	32%	0%	0%	3%

→ 97%の参加者が講座の内容に満足と回答

○ 都市と農業の問題について参加前より関心が高まったか。

高まった	少し高まった	変わらない	無回答
56%	42%	3%	0%

→ 97%の参加者が都市と農業の問題に関心が高まったと回答

このうち、特に注目すべきは「講座受講後に都市と農業の問題について関心が高まったか」という設問に対して、参加者の97%が「関心が高まった」と回答している点です。筆者は農林水産省において10数年の勤務経験があり、一般の方を含むさまざまな方に対する政策説明の経験が数多くありますが、今回のように女子大生、地域住民、行政、産業という多様な参加者、特に10代の女子大生を半数程度含むグループに対して、「都市と農業」をテーマとして講義形式で知識伝授型の説明をせよと言われれば、これほど高い数値で「テーマについての関心が高まった」と回答していただける自信はありません。

今回のテーマにもともと関心を持っている者が参加したというサンプリングバイアスの問題はあるものの、今回の公開市民講座で実施した「参加型・対話型」のスタイルが、これまでとすれば二項対立的な捉え方がなされてきた都市と農業の問題を「生活者視点」で総合的に捉えなおし、参加者が自らの問題として考える上で果たした役割は大きいと考えています。

5. まとめ

現代生活学科として初めて開催した今回の公開市民講座は、本学科の主要な3つのフィールドのうちの2つ「環境」、「自立社会」に関係する「農を活かした新たなライフスタイルを考える」をテーマとして、女子大生、地域住民、行政、産業という多様な参加者による「参加型・対話型」のスタイルにより実施しました。この講座によって地産官学の多様な関係者が、都市と農業・農村の関係について二項対立的な捉え方ではない新しいあり方を考えるきっかけ作りが出来たのではないかと考えています。

一方で、都市と農業・農村のあり方を捉え直す取組はまだ緒に付いたばかりです。参加者からは、

- ・ 関心のある内容だったので大変良かった。続けていただきたい！（50代男性）
- ・ 新しいディスカッションの形式が興味深かったです。このテーマを連続シリーズにしてほしいです。（30代男性）
- ・ とても良い機会だった。様々なアイデアを実現するために次のステップに進んでいきたい。（30代男性）

等の意見も寄せられています。筆者、また本学科としては今回の公開市民講座を単発のイベントとして終わらせることなく、地域住民、行政、産業界との協働をさらに深化させ、地産官学連携の取組を推進

していく考えです。

(参照資料)

香取一昭・大川恒（2009）『ワールドカフェをやろう』日本経済新聞出版社

総務省（2012）『情報通信白書（平成 24 年版）』

内閣府（2014）「農山漁村に関する世論調査」

農林水産省（～2014）『食料・農業・農村白書』（～平成 25 年度版）